

「をちこち散歩」は2人の筆者が6回連載します。

をちこち散歩

@Inle Lake

## 水に溶ける日

## 水

の色に染まる朝、ボートで私を迎えに来たのは、インダー族出身の青年だった。ミヤンマーのシャン州、インレー湖に浮かぶように建てられたホテルに私は滞在していた。湖周辺の村に暮らすインダー族は、湖面に藻

や泥で浮島を作り、その上に家を建てて住んでいる。私は、ボートの運転手兼ガイドの青

年に毎朝、気が向いた場所を回ってもらっていた。ここでは、あつてないような陸地よりも、自由自在に動ける水面が主要道路なのだ。人々は水と共に生き、水と共についてを考える。だからか、青年が私を連れて行く場所のことごとく

に、水の存在が見え隠れする。

インダー族の人々が湖で捕れた魚や浮島の畑で作った作物を売り、山の民から山のもの、町の人からは町のを仕入れる市場も、湖に面している。山から来た民族衣装を纏った女性たちと青年とは違う言葉をしゃべる。だが、シャン語というこの地方の言語が辛うじて二人の会話を繋いでいるらしい。

青年もかつて修行したという僧院近くの井戸で、小坊主たちが水浴びをしていた。こちらに向かつて手を振りながら何かを叫んでいるその言葉は、水の言葉か、それとも山の言葉か。水の音は、ずっと響き続けている。

夕方の光が湖面をオレンジ色に

染める頃、青年は湖上のホテルに私を送り届けた。これから親戚のいる近くの村へ行くらしい。

オレンジ色が紺色の闇に変わっていくある時間、コテージとコテージを繋ぐ水上の渡り廊下にひとり立って、私は青年があつちだよと指差した村の方向を眺めた。人々の笑い声や、話し声や、食器が触れ合うような音が、水の音に混じって、ざわざわざわ、と聞こえてきた。青年の声も、あの中にあるのだな、そう思いながら眠りについた。

しかし翌朝も迎えに来た青年は、昨夜はホテルの船着場にボートを停めて寝たと言い、そのほうがいいんだ、と湖に溶けそうな目をした。

のり  
紀  
なかがみ  
中上  
作家